

第10回 優秀賞(銀賞)受賞作品

# 「シルベル」

神奈川県 日本女子大学附属高校三年 古閑 友梨香



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

### 『シルベル』

神奈川県 日本女子大学附属高等学校三年 古 閑 友梨香

月が零れ落ちるようなほど、大きく輝く夜の」と。小高い丘に一匹の獣が降り立つた。銀色の美しい毛並みに、地を駆ける四足を持つ馬の形をして、背には空を自由に羽ばたく翼が生えたペガサス。アイスブルーの瞳は湖畔のようで、静かに僕を見つめていた。流星群と一緒に降ってきた獣は、すん、と僕に顔を近づけて、ああああああ。

僕は「あ」を書きなぐつていた右手を原稿用紙から離した。鉛筆を紙の上へと転がす。ただ「あ」を連續させただけで壊れてしまった世界。別に世界を左右してゐるつて感覚ほしゃに、こんな」とした訳じゃない。続きの言葉が思いつかなくて、無意味に文字を連ねてしまつただけだ。僕は話すことや書くことが苦手だ。自分の思いを言葉に乗せることができない。

心を言葉にするのは、どうしてこんなに難しいのだろう。美しい情景が心の中にあるのにそれを形にできない。すーと透き通るような言葉が、ぽーんと遠くに響き渡る言葉が、出でない。鉛筆で書くと味気ない文章となつて表れてしまつ。

僕は、美しい彼を書きたいだけなのに。時々、ふと心の奥底から湧きあがつてくる銀色の天馬の姿。あの子だけは上手く書けるといひのに、いつも上手くいかない。毎日、原稿用紙に向かつているけれど、失敗ばかり。今日も駄目だった。

……心に浮かぶ彼に手を伸ばすけれど、いつも空を切つて掘<sup>つか</sup>めない。

書けなくなつてしまつたら、何回頭をひねつたつて上手くこきやしない。毎日同じことをしてゐるんだから、分かる。

僕は、原稿用紙の上に手をついて立ち上がつた。はずだつた。

「あれ?」



ちゃんと机に手をついたはずなのに、全然硬くなかった。ぐねっとスポンジを押して沈んでいく感触がする。え？ 手を見てみると、僕の手は原稿用紙の中に沈んでいた。支えをなくした僕の体は、そのまま原稿用紙へ吸い込まれるように向かう。傾いた体は止まらない。どうしよう…。怖くて目を閉じる。僕は、白い世界に飲み込まれていった。

ひゅうひゅと空気を裂く音がする。目を開けると、僕は空中にいた。僕の体は落下していぐ。上には白く大きな月、下には草原があつて、少し離れたところに街が見えた。

そのまま落ちたら、どうなっちゃうんだろ。そう思つていたら、だんだん速度がゆっくりになつてきて、たん、と軽く地面に足がついた。よかつた。息を吐き出すと、ごつん、と頭に何かが当たつて地面に落ちた。

「これは、『あ』の文字……」

空を見上げると、黒い「あ」が降つてきた。それらは僕の周りにぱりぱりと落ちていぐ。僕がさつき書いた「あ」の文字も一緒にいってしまったのかな。

「これは一体どなんだろ？」

現実じゃないとだけは分かつた。だつて毎なのに太陽の姿はなくて、大きな白い月が浮かんでいるんだもん。家で見た月よりも、二倍も三倍も大きな月だった。僕はあそこから落ちてきたんだ……。

きょろきょろと周りを見ると、遠くから人が駆けてくるのが見えた。その人影は段々近づいてきて、同じ年くらいの女の子だつて分かつた。白いフルのワンピースを風になびかせながら、僕の元へ走つてきた。

「新人さんだよね？」

雪のよろに白い肌で、セミロングの白い髪、薄水色の瞳をした女の子。彼女は目の前に立つと、弾む息を整えながら言った。

「言葉と世界の狭間はざま、エルへようこそ！」

両手を広げて、芝居がかつたような動作をする。

「新人？ エル？」

「これは、人の夢が形になつた空間、エル。人の言葉から全てのものが作られているわ。人の夢が、文字と現実世界の間に不思議な空間を生み出した



の。私も想像からできた存在。勿論、君も新たに生まれた想像上の存在。だから新人さん

女の子は分かるような分からぬような説明をした。

「つまり言葉が形になつた夢の空間よ」

もしそうなら、僕の心に住むペガサスもここにいるのだろうか。

「意味、分かった?」

「うん。ありがとう。でも一ついい?」

「ん? なに?」

「僕は新人じやないよ。だつて僕は現実からあの月を通つて落ちてきただから」

「え! 君、クレアトルなの?」

女の子は驚いて、澄んだ瞳を丸くした。

「つて、意味が分からぬよ。ここでは、私達を作る人間のことをクレアトルって言うの」

「そうなんだ」

「クレアトルがエルに現れたのは、初めてのことよ。発見者が私つてなんだか得した気分」

女の子はにつこりと笑う。興奮で頬に赤みがさしていた。

「……僕は戻れるのかなあ」

「人の夢の世界だから、夢が叶えぼさきっと帰れるよ。ここにいるつてことは、君には夢があるんじゃないの?」

「ペガサスに会いたい」

心に最初に浮かんだのは、あのペガサスの姿だつた。彼に会えば、僕は自分の言葉を手に入れられるかもしれない。

「ペガサス? ここではなかなか見かけないけれど、知り合いなの?」

「彼は、よく心の中に出てくるんだ……」

「そつか! 君は、ペガサスのクレアトルなんだね」

「うん、分かった! と彼女は手を打つた。

「え、なにが?」

「一緒にペガサスを探そう!」

「いいの?」

女の子は笑顔で頷いた。彼女が歩き出したので、横に並びながらついていく。

「そういえば、君の名前は？」

「僕は、タロウ。よろしく」

「私は……、」

「え？」

「クレアトルは私に、まだ名前をつけてくれてないの」

「そう、なんだ」

「でもね、あの人は私を大事に思つているって知つてるから平気よ。いつも名前を、つけてほしいけど」

女の子は田を細めて空を見上げた。

「ねえ、タロウ」

女の子は寂しさを打ち消すように、僕の名前を呼んだ。

「この空は、絵師によつて描かれているのよ。でも、用だけはいつも変わらないの。ずっと同じ場所にあつて、優しい光を与えてくれる。その向こうから、タロウは来たのね」

「うん」

僕は人と話すのが苦手だ。話が嫌いなわけじゃない。言葉が出てこない自分にもどかしさを感じる。いい相槌が打てないし、いつも受け身。今だつて、ずっと女の子が話をリードしてくれている。自分から話すことができたら……。

がさり。

考えながら歩いていたら、前から音がした。

「おやおや、これはお嬢さん。」んにちは。そして、隣の子は新人さんかな？」

前に立つていたのは、作業着姿で大きなトランクを持つた一足歩行の猫。

「いや、それがね、クレアトルなのよ。やつは落ちてきただといふを見つけたの」

「へえ！ それは珍しい！」

猫は僕を見上げて、驚く。

「タロウ、こののはミスター」「ロル。やつは話した空を描く絵師さんよ」





「この猫が……よく見ると作業着は絵の具で汚れていた。あのトランクには絵の道具が入っているのだね。」

「今から絵を描きに行くの?」

「ああ。今日は月が一等綺麗に映る湖のほとりで描くかと思つていたんだ。」

「そうだ、君が来た記念にリクエストをきこうか。今日はどんな夜空がいい?」

「え、えつと、ペガサスが似合つ夜空がいいです」

「はて、ペガサスかね?」

「はい。僕、ペガサスを探していて……今夜会えるように願いを込めて」

「ふうむ、そうか」

ミスタークロルは右手を顎あごに当して、思案顔をした。

「いいぞ、分かった。今日の夜空を楽しみにしていてくれ」

「ありがとう!」

ミスタークロルはうなずくと、女の子に向き直った。

「ああ、そういえば。街での若者がまた荒れていたよ。皆、君を探していた」

「それは大変! 行かなくちゃ!」

彼女はミスタークロルに一礼して、僕を見た。

「ちょっと寄り道してもいい?」

うなずく僕の手を掴んで、女の子は街へと駆け出した。

街につくと、空は赤く染まっていた。ミスタークロルが塗り変えているのだろうか。

レンガの道を踏み、街を歩いていると、二つの人形が僕達のところへかけてきた。

「あ! はやくこっちにきて!」

「ストーロンがまだどなつてる!」

人形は瓜二つで、マリオネットのような格好をしている。

かたかたと走る人形の後についていくと、大きな男が女性を怒鳴っているのが見えた。



「お前のクレアトルは、お前をどうした? イメージも固まりず、未だにそのままじゃないか。クレアトルは俺達を作つておひそかに忘れてしまう。俺はあいつらが大嫌いだ!」

男が怒鳴つている女性は、人の形をしているけれど、黒い文字で構成されていた。「女性」「二十歳」「魔女」「優しい」など、様々な文字が見えた。あれは一体……?

「エルの全ては、文字から出来ている。だからイメージが固まつてない」と、ただの文字の集合体になつてしまつ」ともあるの」

僕の視線を感じて、女の子は答えた。そして、ずんずんと駄の元へ進んでいく。僕は少し後ろをついていった。

「ちょっと、ストーロン!」

女の子は大声を上げた。

「あ?」

男は「ひかりを見る。男、ストーロンは形の整つた顔を怒りに歪ゆがめていた。強い怒りを感じる。けれど、どうしてだろう。彼の瞳の奥は、傷ついているように見えた。

「あなたの事情は分かるけれど、人にあるのは止めて」

「あたつてねえよ。俺は正論を言つてるだけだ。」こいつはイメージが固まらないまま過ごさなきやならないんだ。それでふと忘れられてみろ、そのまま「ひかり消えてしまう」

「消える?」

僕は小さく呟いた。

「「」は、ひとがのぞんだゆめのせかい」「ひとからわすれられたら、そんさいできない」

人形は僕の疑問に答えてくれた。自分の思い描いた空想を忘れてしまつたら、その時彼らは消えてしまうんだ。面白いものがいっぱいあるけれど、こはネバーランドじゃないらしい。

「俺は、何回も消えていく仲間を見た。忘れられて消えていく夢を! 誰にも知られない俺達は、誰にも知られないまま消えていく。それなり最初から作りなきゃいい」

「そんないと、本当は思つてないでしょ?」



「いいや、本心だ。大体、お前だつて……お前だつて、名前も無く、クレアトルの言葉が足りないものだから、いつまで経つても本当の姿にはならないだろ！」

「……そう、だけど」

本当の姿？ 彼女の姿は偽物なの？

「ん？ そこには新人か？」

ストーロンは女の子の後ろにいた僕に手をつけた。新人じゃなくクレアトルだつて言つと、きっと大変なことになる。僕は誤解されたまま何もせず、ストーロンを見た。

「だつたらいい」と教えてやるよ。俺達は人の望みが形になつた。俺はあいつが望んだ強さ、そのものだ。誰にも支配されない強さと人を思う優しさを持った、理想の人格」

僕はどうしてペガサスが心に浮かんでくるのが、やつと分かつた。アイスブルーの瞳のよう澄んでいて、自由に地を駆けるような、空の果てまで飛べるような、そんな言葉を話したい、伝えたいって、願つていたからだ。僕の望む言葉がペガサスになつて現れた。

「だけどな、俺達は生まれただけで何もできない。ただ夢の終わりを待つだけの存在なんだよ。それは、必要な存在だと思うか？ いつかなくなつてしまつなら、夢は要らないんじゃないかな？」 なあ、新人？」

「僕は、」

「あ？ 聞こえないぞ？」

「僕は！」

大声を張り上げた。

「ストーロンは、クレアトルじゃなくて自分が嫌いなようにしか聞こえない。何もできない自分に腹を立てているんじゃないの！」

「…………」

ストーロンは手にぐつと力を入れて閉じた。そして手を開くと、瞳の中はぐるぐると揺れていた。

「俺は、愛されたい訳じゃない。気付いてほしい訳でもない。ただ、俺はあいつに会いたいだけだ。会つて、話がしたいだけだ」

ぱつりと語り出す。



「人から色々言われて傷ついているあいつに、あいつが望んだ強さを持つ俺が助けてやりたいんだ。でも、それはできない。俺には実体がないからな。夢はどうやつたつて現実には行けやしないんだ。それが、もどかしくて、くやしい。お前の言う通り、嫌いなのはあいつじゃなくて自分だ」

「あいつぎりと右手を握りしめていたのが見えた。

「俺は何もできないまま、あいつは夢を忘れちまう! 願つたことを! 梦を捨てないでほしつて消えゆく仲間は皆思つていた。夢を捨てることとは、諦めるひとだと知つていたから。俺はいじつてのだけで、あいつの役には立てない……」

「そんな」とはない! 僕たちは、人間は、クレアトルは! いつか夢を忘れる時がくるかもしれない。けれど、その夢は永遠に心の深い場所に残る。自分を支えた夢は、自分の一部になるんだ。今は、それを忘れていても、気付かなくても、ふとした時に湧きあがつて幸せにしてくれるって僕は、そう思う!—」

感情のままに言葉を発していく。今までつつかえていた言葉も、すりすりと川のようになに、今は激流となつて流れしていく。

「お前……、クレアトルなのか」

「そうだよ! 僕はクレアトルだ! 僕たちは、夢を見て、それを言葉に表す。もし夢が叶わなくても、現実を知つても、夢見たことは後悔しない。君達が僕達を愛しているように、僕達は君達に恋焦がれているからだ!」

はあはあはあ。大声を張り上げたせいが、息切れしてしまった。

「最期に、お前に会えてよかったですよ」

青年の体は足元から形をなくして、破れた原稿用紙へと変わつていく。

「え? ストーロン、もしかして……」

「物語におしまいがあるように、夢が覚めてしまつよう」、全ての出来事には終わりがある

白い紙は風もないのに、吹き飛ばされるよつにして空へと飛んでいく。それは白い鳥のように見えた。

「今まで迷惑かけて悪かったな。俺は、一足先に夢の果てへと行つてくる」



彼の笑顔も紙へと変わり、空へ舞い上がる。白い紙は砕けた文字へと変わり、そして輪郭がだんだんぼやけて空に溶けていった。

「ストーロンは、クレアトルの笑顔を誰より願っていた」

女の子は、小さく言った。

「あの『ごがゆめをわすれたら?』

「かなわぬゆめはきえてゆく」

「『ども』ころをなくしたら?」

「ゆめをわすれたおとなになつた」

「だけどわたしはおもつてる」

「いつでもきみのしあわせを」

双子の人形は手を繋ぎ、静かに歌う。僕達は、彼の消えた空を見上げていた。

僕達は、人形達と別れて街を出た。ペガサスを探しに小高い丘を登る。

「ねえ、君の本当の姿って……?」

女の子は問い合わせに答えず、黙つたまま歩き続けた。  
もう夜になってしまった。濃い紫色に染まつた夜空は、大きな白い月が映えていて美しい。丘の上で、僕たちは向かい合つて立つていた。女の子は、やつと口を開く。

「私、君が落ちてきた時からクレアトルだつて気付いてた」

「どうして?」

クレアトルは初めて見たつて言つてたのに。

「私を作つた人だもの。見て、すぐに分かつたわ」

「もしかして、君は、」

女の子は、アイスブルーの瞳を細めた。その瞳は、探していたペガサスと同じ静かな瞳。

「ペガサス!」

「そう。今まで黙つていてごめんね。私は、君と一緒にいたかったの」

ペガサスは、女の子だった。「彼」ではなかつたのだ。

「私、ずっと君に会いたがつた。そして、言いたいことがあつた」

彼女は、優しげな表情を見せる。



「私は知ってるよ。言葉に表せなくても、君が私を思っていたこと。私を生んでくれてありがとう」

僕の田から一瞬の涙が頬を伝う。

「そろそろ……帰らなきやいけないね」

彼女は静かに言った。

「私が君を田まで送つてもいい?」

「え? でも君はペガサスになれないんじゃなかつたの?」

「タロウは、もうありのままの心を表わす言葉を掴んだ。だから、私はペガサスになれる」

女の子は僕を見つめる。

「回りの世界で君に私を書いてほしい。そして、帰つたり名前を付けて?」

「分かつた。約束する。僕は君を書くよ」

「タロウ、ここを忘れないで。私達がいて、貴方を愛しているってことを、忘れないで」

彼女の体は白く光つて文字へと変わり、ペガサスの形が作られていく。月の光を浴びた白い艶やかな体毛は美しい銀色に輝き、そしてアイスブルーの瞳は夢にみた通りだつた。ペガサスの姿に変わつた彼女は、僕の顔に近づいて、すん、と鳴いた。そして、顔を自分の背に向ける。乗つて、といつたらしき。

僕が乗ると、ペガサスが前足で地面を一回叩くと小さな星が弾けて消えた。彼女は駆けて助走をつけると、ぐんと白い翼を広げ空へと飛んでいく。地上が少しづつ遠くなつていく。下を見ると、湖のほとりに一匹の猫が立つていた。ミスタークロルだ。彼はキャンバスに何かを描き始める。すると、眼前に流星群が現れた。きっと彼は餞別だ、と言つてゐるのだ。僕達は、空の果てにある月へ一直線に飛んでいく。

僕は彼女の首に抱きついた。もう別れの時は近い。田はすぐそゝだ。彼女は悲しげで美しい鳴き声をあげた。そして僕は、田へとぶつかつていつた。ぱん、と突き抜けたような感覚がして田を開けると、僕は椅子に座つた。目の前の原稿用紙を見ると何がが突き破つたような穴が開いていた。それを親指でなぞる。

賢治のまちから

# 高校生☆童話大賞



僕は、原稿用紙の題名に「シルベル」と彼女の名前を記す。そして、続きを書き始めた。今度は、ちゃんと君のことと君のことを書けそうな気がする。